

総合的な学習の時間を中心としたグローバル人材を育成する単元構想

関戸裕，堀籠謙友，黄川田健，上田佳穂，松舘慧，伊藤陽平*，田代高章**

岩手大学教育学部附属小学校*，岩手大学教育学部学校教育科**

(令和3年3月4日受理)

1. はじめに

岩手大学では、グローバルな視点で復興に尽力する学生を育成することを中期目標に掲げている。また、同じように岩手県でも、「いわてグローバル人材育成推進協議会」を設置し、岩手の豊富な資源を積極的に生かし、世界に発信するグローバルな視点を持ち、世界の平和や国際的な課題解決、自立した多文化共生社会の実現を担うことのできる人材の育成を目指している。

これらのことから、子供たちが生きるこれからの社会では、「グローバル」の視点の重要性が増してきているといえる。この視点は、小さい頃からの地域を愛好する態度や世界を見据えたグローバルな思考を育てることで、大人になった際に社会的事象に対する見方・考え方の一つとして発揮されると考えられる。

そこで、本プロジェクトでは、岩手大学教育学部附属小学校第6学年の総合的な学習の時間において「グローバル人材」を育成するための単元を開発し、実践を通して成果や課題を明らかにしていきたい。

そして、以下のような「グローバル人材(子供)」を育てていきたい。

多様なローカル文化を理解し、グローバルな視点を持ちつつ、地域社会に貢献しようとする子供

これまでの研究から、グローバルという題材に最初から向かわせることは、子供たちにとってハードルが高いのではないかと考えた。なぜなら、言葉の意味を理解しグローバルな視点で探究することや自己の生き方に結び付けることに困難さが感じられたからである。そこで、今年度は、年間指導計画を見直すこととした。グローバルの視点を分解し、ローカルからグローバル、グローバルへと段階的に移行していく中で、地域社会から国際社会に視野を広げていくのが有効ではないかと考えた。

また、子供たちの目を国際社会に向けさせるきっかけとしてSDGsの視点が効果的なのではないかと考えた。SDGsは、国際的な課題に対し、個人や地域レベルの行動から解決していこうとする取組である。SDGsの考え方に触れることで、国際社会と地域の双方を往還しながら考えを深められるグローバル人材が育成されるのではないかと考えた。

2. 研究の重点

本プロジェクトでは、以下の2点を重点として取り組むこととした。

- (1) グローバル人材を育成するための年間指導計画の作成
- (2) SDGsの視点からグローバルな思考を育てるための単元開発

3. 結果

(1) グローバル人材を育成するための年間指導計画の作成

①年間指導計画作成の方針

年間指導計画を作成する上で以下の4点に留意した。

- 「グローバル」を「ローカル」と「グローバル」に分けて探究課題を設定し、段階的に視点を広げられるように配列すること。
- 「ローカル」の単元では、地域の魅力を対象に探究課題を設定し、地域のよさを理解し愛好する態度を育めるようにすること。
- 「グローバル」の単元では、国際的な課題を身近な地域生活と結び付けながら探究できるようにすること。
- 可能な限りゲストティーチャーを招いたり、リモートでの交流をしたり、実際に人と関わりながら学べるようにすること。

②年間指導計画の比較

前記の指針に沿って、年間指導計画を見直した。
以下にこれまでの年間計画と今年度の年間計画
を比較し、変更点からの効果を考察する。

【過去の年間指導計画】

◎「グローバル」を年間テーマとする計画

- 4月 オリエンテーション
5月 単元①「グローバル人材を知ろう！」
※国際交流センターの方からの講演
※グローバル人材の方からの講演
6月 単元②「とことん追究！卒業研究」
※個人の追究課題の設定と情報収集
※地域の魅力や課題の追究
7月 単元③「外国の人と交流しよう！」
※外国人留学生との交流
9月 単元④「外国の人に盛岡の魅力を伝えよう！」
※盛岡ガイド（外国人に英語で観光案内）
10月 単元⑤「函館のグローバルを見つけよう！」
※学習旅行における函館での追究
12月 卒業研究発表会
2月 単元⑥「グローバル人材になろう！」

【今年度の年間指導計画】



◎段階的に「グローバル」の視点に移行する計画

- 4月 オリエンテーション
5月 単元①「とことん追究！卒業研究」
※個人の追究課題の設定と情報収集
※地域の魅力や課題の追究
6月 単元②「附小オリンピックメダルをつくろう！」
7月 卒業研究 ※夏休みに情報収集
8月 卒業研究 ※情報の整理・分析
9月 卒業研究 ※レポート執筆
10月 単元③「一流に学ぶ旅～仙台の一流から～」
※学習旅行における仙台での追究
11月 卒業研究 ※発表資料作成
12月 卒業研究発表会
1月 単元④「SDGsを学ぼう」
※SDGsの視点から国際的視野に移行
2月 単元⑤「わたしのSDGs」
※国際社会と地域社会のつながり

③考察

過去の年間指導計画は、年度初めに「グローバル」という大きなテーマに出会わせ、一年間を通して「グローバル人材」と関わりながら学習を進めたことにより、「広い視野に立って物事を見る」という価値観が育った。単元を進めていく中で、「グローバル人材」とはどのような人なのかという問いに対し、「地域の魅力を世界に広く発信する人」「地域と世界をつなぐ人」など自分なりの解をもつことができるようになった。

一方で「グローバル」という新しい概念に対し、その意味を理解してグローバルな視点に立って追究することや、自己の生き方にまで結び付けることに難しさが感じられた。

そこで、今年度は「グローバル」を「ローカル」と「グローバル」に分けて探究課題を設定した。まず、岩手県や盛岡市の魅力や課題を探究の対象とする「卒業研究」を第1単元とした。また、学校の特徴やよさをデザイン化する「附小オリンピックメダルをつくろう！」の単元を6月に設定した。ローカルな魅力や課題を十分に追究し、ローカルな視点から地域を愛好する態度を育てた上で、国際社会へと段階的に視点を広げ、グローバルな視点で課題を考えられるようにした。そして、SDGsの視点から地域社会と国際社会を往還しながら自己の生き方を考えるグローバルにならなければならなかった。

このことにより、年間計画の課題であった「グローバル」の視点へのハードルは解消されたと考える。子供にとって最も身近な学校から地域社会に探究の範囲を広げ、さらに国際社会の課題に目を向けさせることは自然であり「グローバル」という言葉の意味を理解したり、自己の生き方に無理なく結び付けたりしていくことができた。

尚、今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、学習活動の設定に制限がかかる状況であった。ゲストティーチャーを招くことや、人と直接会うなどして探究することが困難であり、密になるような集団での学習も実施が難しかったため、個人での追究することが可能な「卒業研究」を第1単元として設定した。

④単元の実際

以下にローカルな視点で地域の魅力や課題を追究し、「グローバル人材」の素地となる「地域を愛好する態度」の育成を目指した単元について紹介する。

単元①「とことん追究！卒業研究！」

○単元について

本校では、4年間の総合的な学習の時間のまとめとして「卒業研究発表会」を設定している。これまでに身に付けた探究的な学習の過程「①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現」を踏みながら、4月から12月の長期間にわたり、35時間の配当時間を設定して個人で追究していった。

○テーマ設定について

今年度は、探究課題の対象を盛岡市や岩手県に限定し、ローカルな地域の魅力や課題を深く追究することをねらいとした。子供たちが実際に取り組んだテーマは以下のようなものである。

- ・「岩手のワカメを知ろう！」
- ・「岩手の魅力をイラストに込めて」
- ・「作家を目指して～岩手がテーマの物語～」
- ・「未来につなぐ岩手の伝統工芸」
- ・「岩手の課題をプログラミングで解決」
- ・「岩手ハワイ化計画！」

○研究発表の様子

子供たちは約7カ月という長い追究活動を通して自分なりにまとめたことについて、7時間のプレゼンテーションを行った。

【発表例1】

追究課題「岩手のワカメを知ろう！」

岩手県が生産量全国一位を誇る特産物であるワカメについて、全国生産量の占有率が約40%にも達するには理由があるだろうと考え、探究課題を設定した。岩手県の土地や気候の自然条件とワカメ生産の関係や、ワカメの生産方法や健康面での効果などを詳しくまとめた。岩手県の豊かな水資源をローカルな魅力として大切にしたいと考えた。

都道府県	収穫 (t)	占有率 (%)	順位
全国	47,672	100	—
岩手県	17,681	37.09	1位
宮城県	16,384	34.37	2位
徳島県	5,946	12.47	3位
三重県	836	1.75	4位
長崎県	804	1.69	5位

岩手は第一位

約40%を占めている

どうして？

岩手の自然環境に適している？

他の理由もある？

子供が作成したパワーポイント資料、ワカメの生産量や占有率に着目して問いを見出し、地域の魅力を探求しようとしている。

【発表例2】

追究課題「岩手ハワイ化計画」

岩手の観光産業を活性化したいと考え、観光資源を有効活用する方法を提案した。観光に関わる複数のデータから傾向を読み取り、観光リピーターの増加をねらった旅行プランを自分なりに考えた。紹介したい観光資源を調べていくうちに、岩手ならではのローカルな魅力に改めて気づき、多くの人を知ってもらいたいと考えるようになった。



子供が作成したパワーポイント資料、岩手のたくさんの魅力を有効活用するために、観光目的別の旅行プランを考えた。

単元②「附小オリンピックメダルをつくらう！」

○単元について

今年度は、新型コロナウイルス感染症対策の観点から運動会を行わないこととした。その代替りの体育的行事として「附小オリンピック」を開催することとした。オリンピックを盛り上げたいという子供たちの思いから、全校のために記念メダルをつくることにした。子供たちは、附属小学校らしいデザインにしたいという思いをもち、附属小学校のよさとは何かを考えることから学習を進めていった。

学校は、子供たちにとって最も小さな社会コ

コミュニティーである。改めて自分が通う小学校のよさや魅力を考えることで、グローバル人材に必要な「地域を愛好する態度」の育成につながると考えた。

○学習の実際

マンダラチャートやクラゲチャートの思考ツールを用いながら「附小オリンピックにふさわしいデザインとは何か。」を考えた。そして、デザインのコンセプトを決めてから一人一人がデザインを考えた。

学級でプレゼンテーション大会を行い、学級代表のデザインを一つに絞った。その後、全校児童に向けてのプレゼンテーションを行い、全校児童の投票でメダルデザインを決定した。



学級プレゼンテーションの様子とメダルデザイン。附属小学校らしい「桜」や「竹」「たけのこ」をデフォルメしてデザイン化している。附属小学校らしさを魅力として捉え、提案することができた。



単元③「一流に会おう旅！郷土の魅力を追究」

○単元について

本単元では、学年テーマ「一流」と関連して郷土の一流の「人・こと・もの」に学ぶ視点から、岩手や盛岡の魅力やよさを具体的な事例を挙げながら伝えることができる力をつけたいと考えた。「岩手や盛岡の魅力は何ですか。」と改めて問われると、自然や歴史、食文化や伝統など漠然としたよさは思い浮かぶものの、具体的にこれだと語ることは、大人でも難しいものである。だからこそ、岩手や盛岡の地形や気候などの自然環境、歴史や文化などにかかわりな

がら地域に貢献している「一流」の人に出会い、具体的な仕事や思いにふれることから感じ取り、学びを深めたいと考えた。

さらに学習旅行において、政令指定都市である仙台市の「一流」の人や街づくりについて、見学や講話を通して学び、岩手や盛岡と比較するなどすることで学びを深めたいと考えた。

学習旅行を含めた単元の学習を通して、多様なローカル文化に対する理解を深め、郷土を愛好する態度をさらに育てたいと考えた。

○学習の実際

【盛岡ブランド 福田パンを見つめ直す】

単元の導入では、地域の「一流」として、福田パンを事例に「一流とは何か」を考えた。福田パンは、盛岡ブランドに選ばれている商品である。盛岡ブランドとは、盛岡市が進める事業であり、盛岡の自然風土・人情・まちなみ・芸術文化・特産品などにおける盛岡らしさ、盛岡の価値に着目した地域ブランドづくりであり、正にローカルな魅力を最大限に活用しようという取組である。「福田パンは、B級グルメに数えられる商品であるが、一流といえるのか。」という問いに、子供たちは5年生までに盛岡ブランドについて学習した経験と、福田さんのインタビューの内容を基に自分なりの答えを考えた。福田パンが、地域の人を笑顔にしたいという強い思いから開発されていること。長年、地域の人に愛され続ける商品であることなどの理由を挙げ、「福田パンは一流である。」との結論を出した。この学びから、「一流のもの」には、それを取り巻く「人の思い」が重要なのではないかという方向性をもつことができた。

【学習旅行 仙台市の一流から学ぶ】

仙台市は、政令都市に指定されている東北最大の都市であり、地方自治や経済の中心となっている。また、歴史的にも東北の中心として発展してきた経緯がある。中心都市として発展してきた仙台市には、そこにしかない「一流」の「人・もの・こと」が多く存在すると考えた。仙台市の「一流」の「人・もの・こと」につい

て、見学や講話を通して感じたり学んだりすることで、多様なローカル文化への理解を深めると共に、仙台市と盛岡市を比較しながら考えさせることで地域を愛好する態度を育てたいと考えた。

仙台市の「一流の人」として、一般社団法人まちくる仙台の栗田直樹さんに講演していただいた。まちくる仙台は、仙台市中心部商店街の活性化とにぎわいづくりを応援すると共に、海外からの旅行者をサポートする拠点を運営する事業を行っている団体である。仙台市のローカルな魅力を活用し、広く海外に目を向けているという点で、グローバルな取組といえる。栗田さんからは、江戸時代から戦前、戦後のまちづくりの様子や、現在行っている地域活性化の取組についてお話していただいた。まちづくりに欠かせないものとして、地域の魅力を見つめ直す視点と、地域を愛する心、そこにしかないものを活かす創造力について商店街の事例を挙げながら説明していただいた。また、栗田さんから見た盛岡市の魅力についても話していただき、子供たちにもう一度盛岡市のよさについて仙台市と比較しながら見つめ直してほしいと提案をいただいた。

二つ目の「仙台市の一流」として、盛岡市にはない魅力的な施設であるうみの杜水族館の見学と施設の方による講演を行った。施設の方からは、東日本大震災からの復興にける思いや、地域の魅力といえるような水族館を目指すため、チームとしての取組について説明していただいた。

学習旅行での学びを通して、子供たちは、地域における「一流」の要素として、地域を愛好する心や、地域の人とのかかわり、地域の資源を見つめ直して活用することが重要であると気付くことができた。

(2) SDG s の視点からグローバルな思考を育てるための単元開発

① SDG s の視点で単元を構想する利点

SDG s は、2015年の国連サミットで採択され、国連加盟193ヵ国が2030年までに達成を目指すことにした国際目標であり、持続可能なよりよい社会を世界全体でつくりあげ、地球上の誰一人取り残さないことを誓っている。その目標は、貧困や飢餓への対策、ジェンダー平等、生産や消費、エネルギー資源や環境などの17項目と169のターゲットから構成されている。

国際的な課題と考えると子供たちから遠く離れた大き過ぎるもののように考えられる。しかし、SDG s は、「行動を伴った目標」であり、その対象は国や地方公共団体は勿論のこと、企業や個人までとされている。「世界の課題は、一人一人の小さなアイデアや行動から解決される」という考え方である。子供たちが、学びの視野を地域社会から国際社会に広げる切り口としては最適であると考えた。また、国際的視野をもちつつ、地域社会に自分の行動レベルで貢献することができるという点で、国際社会と地域社会とを往還するグローバルな考え方が身に付くのではないかと考えた。

② 単元開発の手立て

- 単元の導入において地球規模の課題、国際社会の課題について自分がどの程度かかわっているのか、子供自身に気付かせること。
- 単元の導入において身近な生活の中で見かけるSDG s について話し合うこと。知ってはいるが理解や行動に至っていない事実気付かせること。
- SDG s に関わって仕事をしている方や、SDG s の視点から社会貢献している人にで合わせること。
- 個人レベルの行動を実際に行い、個人と地域、国際社会のつながりを考えさせること。

③単元の実際

以下に実際に行った単元について紹介する。

【オリエンテーション】

SDGsについてその概要を知り、興味・関心をもたせることをねらいとしてオリエンテーションを行った。近年では、日本でもSDGsの取組が進んでおり、生活の中でもテレビや新聞、雑誌、ポスター、商品などで見かけるようになった。SDGsのマークやロゴを示すとほとんどの子供たちが目にしたことがある状況だった。しかし、SDGsがどのような取組なのかを問うと、ほとんどの子供が答えることができなかった。子供たちは、「世界の問題とは何だろう。」「どんな目標があるのだろう。」「具体的に何をすればいいのだろう。」「どのくらい達成できているのだろう。」とたくさんの問いをもつことができた。



オリエンテーションの様子。SDGsについて見たことがあるという子供は多数であったが、内容を知っている子供は、97人中2名だけであった。

【インターネットによる情報収集】

オリエンテーションでもった問いを解決するために、インターネットによる情報収集を行った。子供たちが調べた内容は以下の通りである。

- SDGsの17の目標とターゲット
- 日本政府の取組の概要
- 地方公共団体の取組の概要
- 企業における取組の概要
- 日本や世界各国の達成状況

SDGsに関連する情報は、インターネット上

に十分に挙げられている。子供たちは、たくさんの情報の中から基本的な内容を捉え、さらに個人の興味・関心に応じて海外の様子や自分たちの住む盛岡市の取組について情報を集めていった。

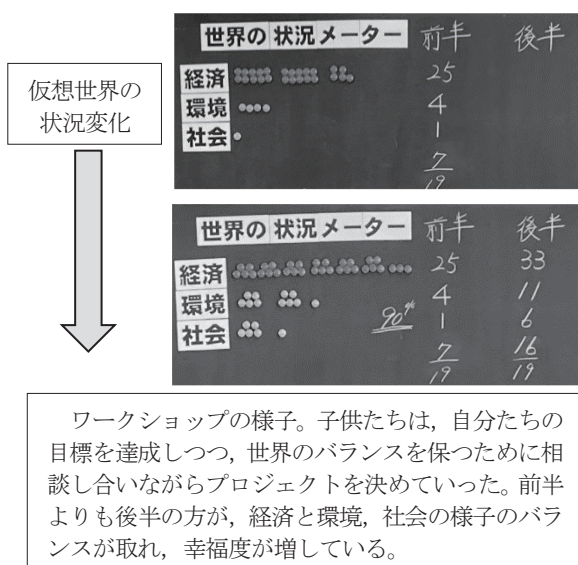


インターネットによる情報収集の様子。SDGsの内容について国連や日本政府、企業のホームページを回覧しながら情報を整理してまとめた。

【SDGsワークショップ】

SDGsについて調べてきたことを、ゲームを通して体験的に学び、理解を深めることをねらいとして、ワークショップを行った。子供たちは、3人のグループを作り、それぞれのチームに与えられた目標の達成を目指してプロジェクトを進めていった。子供たちの選んだプロジェクトによって世界の様子に変化する。ゲーム前半の子供たちは、自分のチームの目標を達成することばかりに目が行き、世界の様子を気にしていなかった。すると、できあがった世界は、「経済ばかりが発展し、環境は破壊され、社会的弱者が多数いる世界」になった。それを受けて、ゲーム後半は子供たちの動き方に変化が起こった。他のチームに声をかけ、足りないものを補い合い、一緒に世界のバランスを保とうと考えていた。子供たちは、「自分のことばかりではなく周りを見ること」「困ったら声をあげること」「余裕があったら助けること」など、多くのことに気付くことができた。これは、そのまま現在の世界の状況に当てはめることができる。SDGsの目標を達成するには、世界の国々が自国のことのみに専念せず、他国の状況を理解して助け合う必要がある。また、個人の行動としても、自分のことだけでなく、誰

かのために小さなアクションをしていく必要がある。子供たちは、ゲームを楽しみながらもSDGsの本質を理解することができた。



【わたしのSDGs宣言】

SDG s ワークショップを受けて、国際的な課題に対して個人で貢献するための行動について考えた。「わたしのSDG s 宣言」と題して、自分がアクションしていく目標と具体的な行動を決めて実践することとした。このことは、国際的な大きな視野をもちながら、地域に貢献しようとする「グローバル人材」の姿に合致するものと考えた。

【今の自分を見つめて】

単元のゴールとして、自分がSDG s から学んだこと、地域社会とSDG s のつながり、自分の行動の仕方、これからの生き方について「自分への提案文」としてまとめることとした。その際、新たな視点としてSDG s の達成に向けてテクノロジーの分野から貢献している事例に出会わせることとした。SDG s

の達成目標である「社会的な孤独の解消」を分身ロボット「オリヒメ」の開発により実現しようとしている株式会社オリィ研究所を紹介し、SDGsにおけるテクノロジーの可能性にも気付かせたいと考えた。盛岡出身のオリヒメ開発協力者に出会わせ、その生き方から学び、自己の生き方を見つめてほしいと考えた。

③考察

SDGsは、国や地方公共団体、企業が具体的な取組を進めており、子供たちにとっても馴染みのある対象となってきた。そのことから国際社会に目を向けさせるきっかけとしては子供の発達段階や生活の中での知識を考慮しても妥当なものと考え。総合的な学習の時間における探究課題の対象となる事例の多くがSDGsの目標項目に整理することができるため、自分たちが追究したことと国際社会を結び付けて考え、グローバルな視点をもたせることに有効であると考え。

4. まとめ

(1) 年間指導計画の作成について

グローバル人材の育成を目指し年間計画を作成する上では、グローバルの視点を分解し、ローカルからグローバル、グローバルへと段階的に移行していくのが効果的であると考え。地域の魅力を追究し、地域を愛好する態度を育てた上で、国際社会へ広げていくのが自然な流れになり、主体的な学習につながると考える。

「グローバル人材」について学び、地域の魅力や自己の生き方を見つめ直したことは、これからの国際社会を生きる子供たちの視野を広げる上で有効である。

(2) 単元構想について

単元構想としては、SDGsに関わる探究課題を設定し、実際に地域のグローバル人材にかかわりながら学ぶことで、地域社会と国際社会を無理なくつなげることができる考える。SDGsは、現在の日本を含めた国際社会の共通

の目標であり、具体的な行動を求められるものでもあるため、グローバル人材育成の主軸とすることは有効である。

謝辞

本研究を進めるにあたり、ご協力いただいた岩手中小企業家同友会をはじめとする関係機関の皆様、本校の子供たちに感謝いたします。また、日常の議論を通じて多くの知識や示唆を頂いた附属小学校総合的な学習の時間（わかたけ）研究部の皆様、学年の先生方に感謝いたします。